

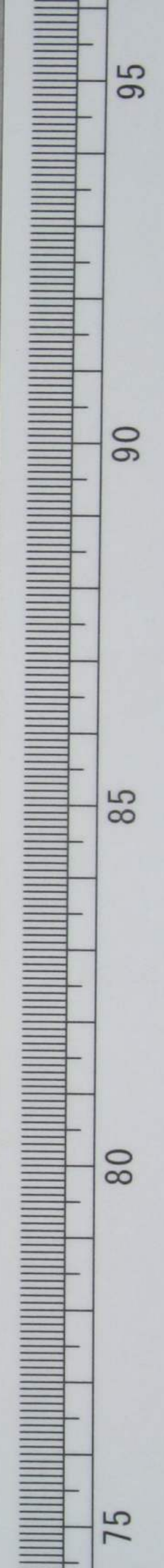
昭和三十六年四月二十日發行 近代文芸資料復刻叢書 I 「新體詩抄 初編」別冊 編修冬至書房發行 世界文庫

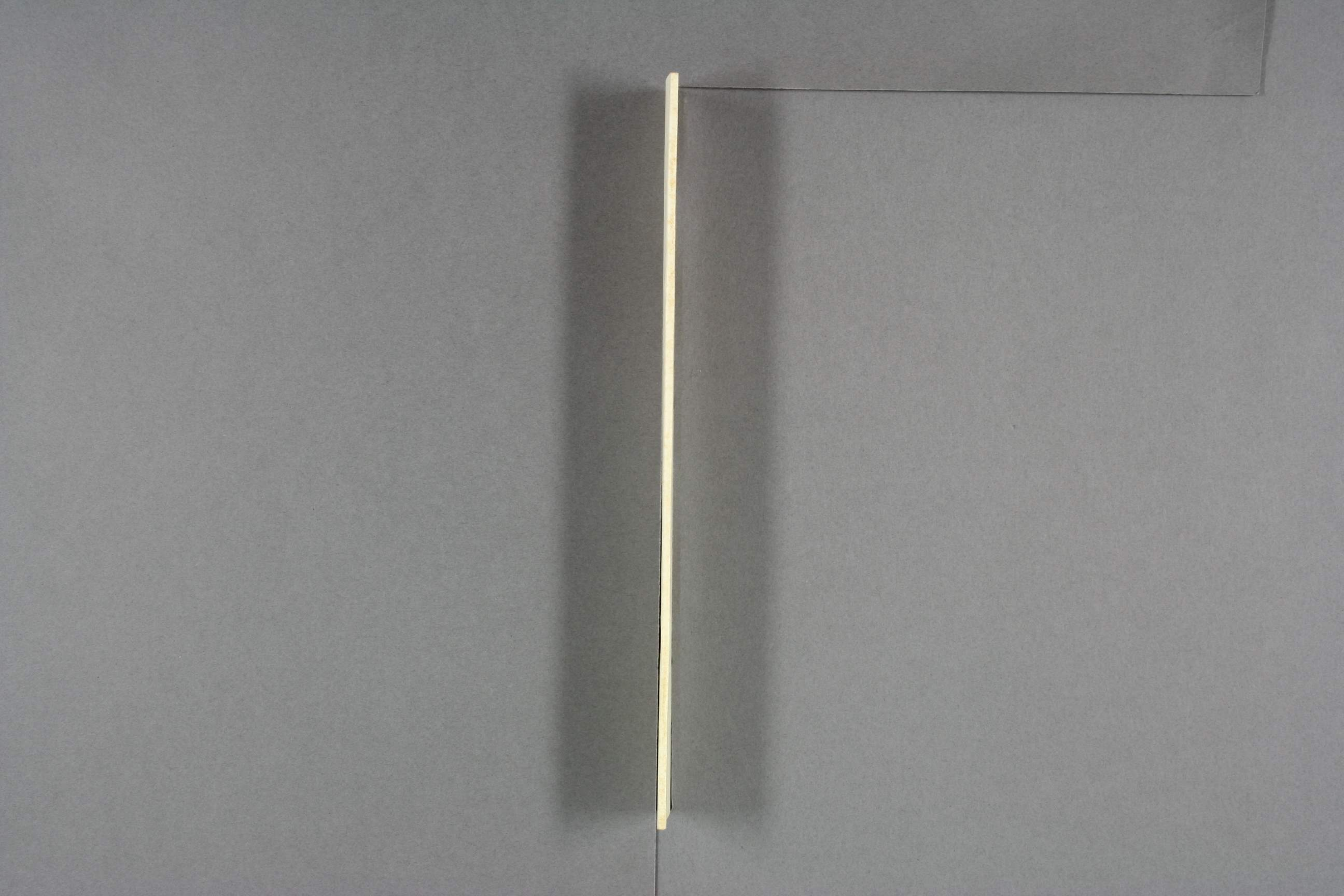
近代文芸資料復刻叢書 第一卷

『新體詩抄 初編』 解題

矢野 峰 人

本間文庫
文庫 14
D148
2





明治大正文芸主要誌復元集成 * 限定三百部耐久豪華版

既刊『屋上庭園』全1・2号 明42・10 全43・2 解説 野田宇太郎

北原白秋 木下杢太郎 長田秀雄等 全一套B 5判麻帙入 頒価 壹千円 千50

既刊『小天地』全創刊号 明治三十八年九月 解説 岩城之徳

石川啄木編輯 与謝野寛 小山内薫等 B 5判麻帙函入 頒価 六五〇円 千40

品切絶版『卓上噴水』全1-3号 大正四年三月-五月 解説 伊藤信吉

萩原朔太郎 室生犀星 山村暮鳥等 全一套B 5判麻帙入 頒価 老千円 千50

既刊五回『感情』全32号 大5年6月-8年11月 解説 伊藤信吉

萩原朔太郎 室生犀星 山村暮鳥等 全12回 A 5判函入 毎回四五〇円 千24

近刊『芸苑』1号『芸文』全1・2号 明35・2 全6・7 解説 野田宇太郎

上田敏 森鷗外 平田秃木等 全一套 A 5判麻帙入 予価 千八百円

近代文芸復刻叢刊

内容見本誌呈

*

東京都渋谷区中通二ノ三四 振替口座 東京 八七〇四

冬至書房



日本の近代詩は、明治十五年八月東京日本橋通三丁目拾四番地なる丸屋善七の店から刊行された『日本詩抄』に始まる。古い「長歌」や「今様」や、『太平記』の「俊基朝臣東下り」の一節や、「謡曲」「浄瑠璃」——例へば『曾根崎心中』の道行の一節のやうに、昔から人口に膾炙する七五調の創作が無いではない。また、明治になつてからでも、キリハト教の讚美歌や、福沢諭吉の「世界国尽」等が無いでもない。明治十二年四月福岡で発行された植木枝盛の『民権自由論』の附録「権田舎歌」の如きも、七五調を基礎として居る。

これら明治以前の作品は、孰れにしても、単にそれが偶々七五調を以て書かれて居るといふに止まり、独立したジャンルの意識を以て書かれたものではなく、また、維新以後のものも、唯、朗誦・記憶に便ならしめるために韻文の形式を借りたといふに過ぎず、何等明白な文芸上の目的を以て試みられたものではない。

そこへ行くと、『新体詩抄』に収められた作品は、創作たると翻譯たるとを問はず、すべて、確固明白な目的——新しい詩体に興さうといふ意識を以て試みられたものである。これらの詩が特に「新体詩」と呼ばれて居る事は、軽々に見るべきではない。それは、「新作の詩歌」ではなく「新

体の詩歌」なのである。この『詩抄』の「編者」の一人であつた外山正一は、後年（明治二十九年三月発行『帝国文学』第二卷第三号所載）「新体詩及び朗誦法」の中で、当時の抱負を回顧して次のやうに語つてゐる。――

我々が。我々の作共に。新体詩と云ふ名称を附けたのは。在来の長歌。若くは短歌等とは異つた一種新体の詩なるが故でありました。左れば。七五でも五七でも。將た。是等の如き窮屈なる詩形に制約せられざるものと雖も。苟も長歌短歌等。昔より在り来りの詩歌に異りたる詩的の作は。皆之を称して新体詩と謂はむとするのが。我々の考でありました。

この「新体詩」といふ記念すべき名称は、同じく「編者」の一人である異軒井上哲次郎の発案にかかる。この名称は、明治四十一年頃迄用ゐられ、やがて「短歌」に対し一時「長詩」と呼ばれ、最後には単に「詩」と呼ばれるやうになつた。其間、与謝野鉄幹が、明治三十五年刊行の家集『うもれ木』に於て「長詩」といふ語を用ゐたこともあるが、これは、時期尚早のためか、遂に広く行はれるに至らなかつた。

さて『新体詩抄』は

ちやせん 嘉永元年―明治三年
外山 正一（一八四八―一九〇〇） 社会学者

しやうこん 嘉永四年―明治三年
尚 今 矢田部良吉（一八五一―一八九九） 植物学者

もんけん 安政二年―昭和十九年
異 軒 井上哲次郎（一八五五―一九四四） 哲学者

等三人の創作及び翻譯すべて十九篇を収めた本文四十二葉に配するに、三人の序文と水屋主人久米幹文の跋文とを以てし、更に正誤表一枚を添へたものである。敢へて「初編」と銘を打つてある所から推すと、反響如何によつては、稿成るに従ひ、第二編第三編と、続刊の意志があつたものと考へられるが、二年後の十七年十二月に、再版を出したのみで、第二編の刊行を見るに至らなかつた。然し、植物学者であつた尚今居士のみは、早くこの方面から離れたけれども、山居士は、明治二十七八年の日清戦争に動かされて「往け往け日本男児」とか「わが海軍」の如き軍歌や「旅順の英雄可児太尉」を詠じたり、既述の如く韻文朗誦法を唱へたりして、新体詩に対する関心を失はず、異軒亦、明治二十九年一月の『帝国文学』（二ノ一）に、『丹後風土記』に取材した長篇叙事詩「比沼山の歌」を掲載し始めなどして、往年の意気込の今尚衰へざる事を示した。

訳詩の原題と作者とを、本詩集所収の順序に従つて記すと、次の通りである。

Robert Bloomfield (1766～1823): Soldier's Home.

(フルームフィールド兵士帰郷の詩)

Thomas Campbells (1777～1844): Ye Mariners of England.

(カムプベル氏英国海軍の詩)

Alfred Tennyson (1809～1892): Charge of the Light Brigade.

(テニソン氏軽騎隊進撃の詩)

- Thomas Gray (1716~71) : *Eegy written in a Country Churchyard.*
 (グレー氏墳上感懐の詩)
- Henry Wadsworth Longfellow (1807~1882) : *Psalm of Life.*
 (ロングフェルロー氏人生の詩)
 (玉の緒の歌)
- Alfred Tennyson : *The Captain.*
 (テニソン氏船長の詩)
- Charles Kingsley (1819~75) : *Three Fishers.*
 (チャールズ・キングズレー氏悲歌)
- William Shakespeare (1564~1616) : *Cardinal Wolsey's Farewell Address.*
 (From *Henry VIII*. Pt.2, Act III.)
 (高僧ウルゼーの詩)
- Charles d'Orléans (1391~1465) : *Sur le Printemps.*
 (シユール・ドレアン氏春の詩)
- H. W. Longfellow : *Children.*
 (ロングフェロー氏児童の詩)
- W. Shakespeare : *From Henry IV. Pt.2, Act III, Scene i.*
 (シェイクスピア氏ヘンリー第四世中の一段)

W Shakespeare : *From Hamlet (Act III, Scene i)*
 (シェイクスピア氏ハムレット中の一段)
 (シェイクスピア氏ハムレット中の一段)

山の方は「シェイクスピア」と書いてあるのに対し、尚今居士は「シェイクスピアール」と記して居り、前者が「ロングフェルロー」と発音して居るのに対し、後者が「ロングフェロー」と発音して居る。そして、同一書巻の目次に、このやうに二様の発音がそのまま記載されて居るのも、当時の外国語学習法がどのやうなものであつたかを示す記録として興味深い。尤も、ロングフェローの方だけは再版に於て「ロングフェルロー」に統一され、シェイクスピアは、異なる発音が肩を並べて残つて居る。然し、シェイクスピアの「ハムレット独白」と言ひ、ロングフェローの「人生の詩」と言ひ、二人の訳者の手に成れる異訳が並置されて居るのは、各々が自信満々、優劣を江湖具眼の士の判定に俟たんとしたためであらうか。

それは兎も角として、この「人生の詩」やウルジの独白がグレーの詩と共に、何故に特に採択されたのであらうか。それは、これらの作品が、明治八九年頃、外山・矢田部の二人が教授であり、当時はまだ旧姓船越を名乗つてゐた井上が学生であつた開成学校に於て、英人教師ジェイムズ・サマーズにより、試験問題として出題されて居たといふ事実によつても容易に推測されるやうに、彼等にとつて、いづれも夙くから最も親しみ深かつたことも、その理由の一つと考へられよう。

創作の方には

抜刀隊の詩

勸学の歌

鎌倉の大仏に詣でて感あり

社会学の原理に題す

春夏秋冬の詩

等すべて五篇が収められて居る。この中、山の「社会学の原理に題す」といふ一篇は、明治十五年出版された経済学者乗竹孝太郎（一八六〇—一九〇九）訳ハーバート・スペンサー原著『社会学の原理』Principles of Sociology に、序文代りに添へたものである。その余りにも非詩的な内容と筆致との故に、後世の嘲笑を買ふに至つたが、這般の事情を弁へるならば、われわれは、むしろ、このやうな序文を敢へて韻文で書いた彼の勇氣に対し、敬意を払ふべきではあるまいか。

それはさておき、今全体を通覧して特に感ぜられる事は、なるほど其処に「春夏秋冬の詩」とか「シャルル・ドレアン氏春の詩」とかの如き、在来の日本詩歌に見られる花鳥風月の諷詠も無いではないが「ハムレットの独白」、「人生の詩」、「墳上感懐の詩」等の如き、広く人生問題を取入れんとする意図が明示されて居る事である。

これは在来の日本人の狹隘なる詩歌観、換言すれば、詩歌をば、概ね、花鳥風月の吟詠、恋愛・

羈旅・別離等の情懷の叙述に限り、思想的・抽象的なものを努めて排除せんとするが如き態度を、根本的に改めようとする意図に出たものに外ならぬ。上述の「社会学の原理に題す」や、「勸学の歌」の如き非詩的なものが特に制作されて居ることは、これを実証するものと言へよう。つまり、彼等は、日本にも西洋流の詩を興さうと欲したのである。

また、「勸学の歌」に見出さるる

池のみぎはの春草の

みじかき夢も覚ぬまに

軒端に茂る桐の葉は

吹く秋風にさそはれて

此年も半ば過ぎぬるを

ふみよむ人はしらずやは

は、唐の朱文公の

少年易老学難成

一寸光陰不可輕

の転結句

未醒池塘春草夢

を邦訳、否な、むしろ換骨奪胎せるもの、これは後に島崎藤村も漢詩や西詩に就いて試み、大竹美鳥が『新体詩歌』第四集（明治十六年）所収「代悲白頭翁歌」に即して試みたものの先駆と言つてよい。総じて、『新体詩抄』の翻譯は、一篇の精神の再現に専らであり、その点に於ては後人の学ぶべき所が多い。

然し、新体詩の創始者が試みたものは、単に取材の上の変化、拡大のみではなく、形式の上にも、彼等は新途に出ようと志して居る。即ち、律格は、その凡例に於て明示されて居るやうに、専ら七五調に則つて居るため、何等の新味も見出されないが、聯（スタンザ）形式が取入れられたり、押韻が試みられたり、「繰返し」（リフレイン）が採用されたりして居るのは、いづれも新しい実験と言つてよい。スタンザ形式に関しては、今迄にも、各節を一、二の番号で分ち、連続的に書流したものはあつたが、節と節との間を空白で区切つたのは、今度が初めてであつた。また押韻に至つては、「春夏秋冬」の第一聯

春は物事よろこばし

吹く風とても暖かし

庭の桜や桃のはな

よに美しく見ゆるかな

野辺の雲雀はいと高く

雲井はるかに舞ひて鳴く

に見られるやうに、その不成功は、作者の詩技が拙いといふ理由よりも、むしろ日本語の性質に起因するところが大なるもので、後世に課せられた一つの問題と言ふべく、巽軒もロングフェローの「人生の歌」の翻譯に於てこれを試みた際、特にその「はしがき」に於て此の点に触れ、次のやうに言つて居る。――

若シ夫レ押韻ノ法、用語ノ格等ハ、次第ニ改良スベキノミ、一時ニ為スベカラズ、看官幸ニ之ヲ諒察セヨ。

然しながら、これらの新しい試み以上に重要な企てとして特筆すべきは、彼等が雅言や詩語を排して平語に頼らうとした事である。それは、尚今居士が「鎌倉の大仏に詣で、感あり」に附した次の序に見られる。――

西洋諸邦ハ勿論凡ソ地球上ノ人民其平常用フル所ノ言語ヲ以テ詩歌ヲ作ルヤ皆心ニ感ズル所ヲ直チニ表ハスニアラザルナシ我日本ニ於テハ往古ハ此ノ如クナリト雖モ方今ノ学者ハ詩ヲ賦スレバ漢語ヲ用ヒ歌ヲ作レバ古語ヲ援キ平常ノ言語ハ鄙ト為シ俗ト称シテ之ヲ採ラズ是レ豈謬見ト為サルヲ得ンヤ

夫レ我邦人ノ漢学ヲ修ムルヤ殆ト皆所謂変則ナルモノニシテ漢土ノ本音ヲ以テ其文ヲ読下スルモ

ノ甚少ナシ然シテ韻書作例等ニ因テ平仄韻字ヲ学知スルモ之ヲ用ヒテ詩ヲ作ルニ当テハ既ニ本音ヲ発スルニ非ザレバ到底室内ニ游泳ヲ試ムルガ如クニシテ隔靴ノ憾ナキ能ハズ何トナレバ凡ソ詩歌ハ意義ノ優美奇巧ナルハ素ヨリ望ム所ナレドモ音調ノ宜シキヲ得ル事亦極メテ肝要ナレバナリ而シテ音調ナルモノハ自國ノ語又ハ他國ノ語ナレバ其音声ヲ曉熟スルニ非ザレバ其真趣ヲ翫味スル能ハザルヤ明ケシタトヘバ變則者流ノ洋学書生ガ辞書ニ拠リ作例ニ從テ音声ノ強弱ヲ学ビ詩ヲ賦スガ如シ誰カ其迂ヲ笑ハザラン又古語雅言ヲ以テ長歌短歌ヲ作り並フルモ吾人常ニ用ヒザル所ナレバ稍外國語ニ類スルガ故ニ之ヲ以テ精密ニ我衷情ヲ摠ベ我思想ヲ揆スコト或ハ難カラシク果シテ然ラバ余以為ク宜ク平常ノ語ヲ少シク折衷シ以テ稍新體ノ詩歌ヲ作り充分ニ吾人ノ心ニ感ズル所ヲ吐露スベキナリ然レトモ之ヲ言フモ為サザレバ人或ハ目シテ妄誕漫言ノ徒ト為サン故ニ余謏劣ヲ顧ス頃者試ニ西洋ノ詩數首ヲ訳シ既ニ其一二ヲ新聞雜誌ニ載セシコトアリ今復此新紙ノ余白ヲ借テ拙作二首ヲ掲ゲ江湖諸彦ノ一粲ニ供ス云々

尚今が此処に「其一二を新聞雜誌に載せしことあり」と言つて居るのは、彼が『東洋学芸雜誌』に掲げた「ハムレット独白」(明治十五年三月二十五日発行同誌第六号)キングズリーの「悲歌」(同四月二十五日発行第七号)を指したもので、キャンブルの詩は、七月の同誌第十号に載つた。

この序文に示されて居るやうな、俗語を交へ平坦の詩を作るのが、彼等の主目的であつたことは異軒も述べて居る所であるが、思想的には、時代に即応したものを詠じようと思つたことも亦、尚今の文に明である。然し彼等の意図の最も痛切にして端的な表示は、却つて戯文めいた、山の序に見られる。

このやうに、彼等は、単に理論を高唱するのみでなく、卒先射行したのである。まことにその勇氣と革新の意気込とは尊敬に値する。もとより、彼等は文学を専門とする人でなく、況や詩作に長じた人でもなかつたから、その出来栄を、専門詩人の作品に比するのは、妥当でないが、わが近代詩史上に占める此の詩集の位置は、十八世紀の終に出たワーズワース (William Wordsworth, 1770~1850) とコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772~1834) との共著にかかる『リリカル・バラッド集』 *Lyrical Ballads* (1798) が英詩史上に占めてゐる位置に似てゐると言つてよからう。或は、それは「革新」(renovation)でなく「創造」(creation)の試みであつた点に於て、むしろエリザベス朝の初期に出た『トッタル編雜詩集』 *Tottel's Miscellany* (1557) に比すべきかも知れない。否な、この二者を兼ねたものと言へる。

今日の眼から見れば、その翻譯も創作も、孰れとして稚拙の域を出ないもののみなのは当然であるが、而もこれらの作品が久しく人口に膾炙し、行人何れも好んで暗誦したと言はれて居るのを見れば、以て如何にそれらが時人の要求に應へ得るものも多くを有して居たかが知られるであらう。現に国木田独歩(明治四年—同四年)(一八七二—一九〇八)の如きは、明治三十年(一八九七)刊行の詞華集『抒情詩』に収められてゐる「独歩吟」の序に於て言ふ。——キリスト教をはじめ、歐洲の人心を鼓舞激励し

つつある雄大な理想が早く我国に入り来れるにもかかはらず、我国には、これが熱情を享け得る程の詩歌を欠きし為、我国の新文明は物質的偏長の弊に陥り、世を挙げて唯物主義の浅薄固陋に走り、宗教は卑下せられ、徒に電気灯のみ輝いて国民靈性の神殿は暗夜の如くである。日本に詩歌の発達せる形式の無かつた事は、新日本の文明を跛足ならしめた大原因の一であると信じて居たが、斯る時、井上、外山両博士等の主唱編輯にかゝる「新体詩抄」出づ。嘲笑は四方より起りき。而も此覚束なき小冊子は草間をくぐりて流るゝ水の如く、何時の間にか山村の校舎にまで普及し、「われは官軍わが敵は」てふ没趣味の軍歌すら到る処の小学校生徒をして足並み揃へて高唱せしめき。又た其のグレーの「チャルチャード」の翻譯の如きは日本に珍らしき清爽高潔なる情操を以てして幾多の少年に吹き込みたり、斯くて文界の長老等が思ひもかけぬ感化を此小冊子が全国の少年に及ぼしたる事は、当時一少年なりし余の如き者ならでは知り難き現象なりとす。……独歩は明治四年の出生であるから『新体詩抄』の出た明治十五年には数へ年十二歳であつた。この年に竹内隆信が『詩抄』の抜萃に、新に数篇を増補したものが、『新体詩歌』第一集及び第二集として甲府で出版され、更にその続篇第三集、第四集、第五集が翌十六年に出、十七年十二月には『新体詩抄』の再版が『新体詩鈔』と文字を改めて出、十九年には竹内本五巻を一冊にまとめたものが『新体詩歌全集』として上梓されて居るのを見ると、如何にこの新派体の韻文歡迎の機運が盛に動いて来たかが知られるであらう。

独歩と同じ年に生れた土井晩翠ツチキ（一八七二—一九五二）は、「新詩發生時代の思ひ出」に於て、四五歳の頃『新体詩抄』を読み、特に矢田部尚今訳のグレーの「エレジー」を愛読し、進んで原詩を漁り読んだと語つて居るが、その年齢を併せ考へると、彼の手にしたのは、再版『新体詩鈔』の方ではなかつたかと思はれる。

また蒲原カンバラ有明アリアケ（一八七六—一九五二）が愛読した詩集は、実にこの竹内本の方であつた。即ち彼は、「創始期の詩壇」と題する回想録の中で次のやうに言つて居る。――

それから少し後になつて袖珍本「新体詩歌」（明治十九年版）が出た。この廉価版は恐らく偽版で、内容に雑駁の嫌ひはあるが、「新体詩抄」の中の創作、翻譯は悉く載せてある。わたくしたちの手に渡つたのはこの本である。わたくしはその当時、姉と二人で競つて、何がなしに集中の詩を暗誦してゐた。

わたくしはその中でも異彩を放つ翻譯の詩を殊に好んだ。

山々かすみいりあひの

鐘はなりつゝ野の牛は

徐に歩み帰り行く……

やがて羊の鈴が聞え、梟が月に訴ふるといふその詩のはじめの方の句が、今でも切れ切れながら口拍子に乗つて思はず吟じ出されることがある。これはグレーが数年刻苦の作として聞ゆる

「墳上感懐の詩」である。このグレイの詩を後には「墓畔吟」と言つた。

もつと難しい詩がある。無理におぼえておいたのを歌ふ。

存ふべきか但し又、ながらふべきに非るか、ここが思案のしどころぞ、運命いかに拙きも、

これに堪へるがますらをか……

歌ふ声が夜風の烈しきにとだえる。幼い頭にも、これが生死の岐れ目であるといふことが臚げながら判る。死は眠なり。夢なり。いよいよそらおそろしい。これは言はずとも著るしきハムレットの苦悶の独白である。

調子が急に勇壮になる。テニソンの「軽騎隊進撃の詩」に移つたからである。……

『新体詩抄』ならずとも、その内容をその儘網羅復刻した『新体詩歌』が有明の手に落ちた事は明治詩発達史上重大な意義を有するもので、恰もトマス・パーシー (Thomas Percy, 1729~1811) 纂訂復刻の『古英詩拾遺』 *Reliques of Antient English Poetry* (1765) がウォルター・スコット Sir Walter Scott (1771~1832) の手に落ち、或は、キーツ (John Keats, 1795~1821) がチャップマン (George Chapman, 1559~1634) 英訳のホーマー (Homer) を繙いて新しい世界を示された「歴史的」事件にも比すべきであらう。

独歩・晩翠・有明らは、いづれも詩人であるから、『新体詩抄』を繙いて大に動かされた事も異とするに足りないかも知れない。然し、たとひ詩心はなくとも、苟も文学を愛する程の青少年にし

て、これに収められた詩の一二を愛誦しない者の無かつた事は、江見水蔭 (一八六九~一九三四) の如き、後に昌険小説家として活躍した人の回想記によつても窺はれる。即ち、彼は『明治文壇史』の中で語つて曰く――

その頃学生で外山正一其他二先生の「新体詩抄」といふ袖珍本を読まぬ者は殆ど無いと言つてもよかつた。太平記の「落花の雪に踏み迷ふ」や、西南戦争の「抜刀隊」や、テニソンの「軽騎隊の歌」や、ロングフェローの「墓畔の歌」やを、ごつちやに編成したままであつた。恐らく新体詩(韻文)の第一の出版で有つたらう。これを自分が愛読したのは勿論で、模倣性に富んだ自分
は之にも凝つた。

安政二年―大正十三年

これは水蔭が杉浦重剛 (一八五五~一九二四) の称好塾に居た明治十八年末から十九年前半期へかけての生活を叙したものであり、且つ、『袖珍本』と言つて居る事から推すと、彼が繙いたのは『新体詩抄』ではなく竹内本の方であつたに相違ない。殊に『太平記』の有名な「俊基朝臣東下り」の一節は『詩抄』には含まれて居らず、『新体詩歌』の第二集に収められて居るものであることによつても、この推測の正しいことは立証されるであらう。水蔭が此処にロングフェローと書いて居るのは言ふ迄もなくグレイのことであるが、英米文学者でもない彼の、晩年に於ける回想記であるから、この種の誤謬はやむを得ない。

然し、この水蔭にしても、独歩・晩翠・有明にしても、彼等が孰れも特にグレイの詩を挙げて居

る事は注意に値する。尚今のこの訳が、他の人の訳に比し、一段とすぐれて居る事は争はれない所であるが、「唯この時に聞ゆるは飛び来る虫の羽の音」と、虫の羽の音を歌ひ入れてゐることも目新しいが、常春藤キヅタまつはれる古塔に潜める鼻が月に訴へるといふ情景は、その表現と共に、日本文学には今迄見られなかつたものではないかと思はれる。羊の如きも、讚美歌はいざ知らず、伝統的日本詩歌に於て、これ以前歌はれた例が果して有るであらうか。

さきに引用した「独歩吟」の序文中にある「嘲笑は四方より起りき」といふ言葉は、井上巽軒が明治三十年一月の『帝国文学』（第三卷第二号）所載「新体詩論」の

吾人が予想せしが如く非難の声は果して各方面より向ひ来れり、然れども非難の声は新体詩の勢力あるを証するものなれば、吾人は唯々其一層激烈ならざるを遺憾とせり

といふ言葉に照応するものであるが、当時の世評を代表するものは、稍後れて明治二十二年『国民の友』第三九・四二・四六の三号に亘つて連載された池袋清風（弘化四年明治三十三年一八四七—一九〇〇）の「新体詩批評」である。この批評が『詩抄』の編者達の脳裡に如何に深い印象を与へたかは、二十八年刊行『新体詩歌集』に附した外山、山の序文に徴して明かである。曰く――

実に光蔭は箭の如し。思へば早や。殆ど十五年の昔なり。矢田部井上の二氏と共に。我れ新体詩抄を著はししは。

世の人は兎角新奇に愕くが恒なり。未だ見慣れぬ体裁の詩とて。詩にも非らず歌にも非らずと難ぜぬは稀なりき。中にも国学者流の如きは。雅俗和漢打雑せての用語。是れはと呆るる許りなりけり。斯る者をば詩杯とは言語に絶えたることとせり。

然し、嘲笑非難の声が「四方より起つた」にもかかはらず、この小冊子が「草間をくぐりて流るる水の如く、何時の間にか山村の校舎にまで普及し」たことは、その刊行直後、相次いで現れた作品によつて十分窺ふ事が出来る。それは、固より、当時澎湃として起つた自由民権思想に鼓吹されたためであるが、小室屈山の「自由の歌」（『新体詩歌』第一集）、「外交の歌」（同第二集）等は、『詩抄』の「社会学の原理に題す」の後を継ぎ、やがて出づべき植木枝盛の『自由詞林』（明治二十年十月高知出版）の諸篇を約束せるものと言へる。『新体詩歌』第五集所収、小川健次郎作「世渡りの海」、犬山居士作「見燭蛾有感」、大竹美鳥作「送学友帰郷歌」等も亦、山詩の系統を継ぐものと言ふべく、第二集の八門奇者作「刺客を詠ずる詩」には、特に、「大学のはかせたちのものせられたる新体詩抄の体に做ふ」といふ「詞書」が添へてある。

また「抜刀隊」が我が軍歌の原流となつたことも忘れてはならない。これに就いても、山は、先に引用した明治二十八年の『新体詩歌集』の序に於て次のやうに述べて居る。――

抑も本邦に於ける今の軍歌の嚆矢は。十四年前に予の作りし「抜刀隊」の歌にして。又本邦に於ける第二の軍歌は。其の後久しからずして是も予の作りし「来れや来れ」の歌なりしなり。當時は勿論。其後と雖も。物識顔の人々は押しなべて軍歌杯とは本邦には用無き者と思ひしが如し。

然るに。十四年の後なる今日に至り。天下一般に軍歌の必要を認むるの時節は到来せり。実に。文部大臣は。学校生徒に軍歌を課すべき事を訓令せられたり。世の中の事は実に面白きものにぞある。尤も、軍歌の作者の数が頓に増加したのは、山自らも認めて居るやうに、「日清戦争の爲めに大いに需要起りしが故」である。

このやうにして『新体詩抄』は、若き時代の思想感情を吐露すべき新しい器を提供すると共に、その見本をも示したのであつた。従つて、苟も志あるものは、おのが才能の有無など省る暇も無く、争つてこの形式を通し自己表現を試みようとしたのである。唯、あまりに強い時勢の圧迫のため、抒情の流れの方がしばし窒息され、専ら自由民権へのあこがれ、即ち社会的自我の叫びのみが声高く轟く事になつた。然し、それもやがて、時代の動きにつれて世情が平静に立ち戻るや、一部青年の間に純粋な文学を求めようとする気運が動くやうになつた。即ち、新しい感性を以て自然と人生とを眺め、これらによつて喚び起された新しい驚異の感を、新しい言葉を以てうたはうといふのである。新声社一派の『於母影』は訳詩集ではあるが、かうした新文学の誕生を促す暁鐘であり、それによつてめざまされ競ひ立つたのが『文学界』同人である。故に藤村出現までの日本の詩壇は、文学通りの創成期であり、準備期であるが、『新体詩抄』はそれに先鞭を着けた開拓者としての栄光を負ふものである。故にその価値は、創作にしても翻譯にしても、文学的な点には存せずして、歴史的意義に見出さるべきものである。

荒蕪の地に鋌を入れ荆棘を芟除して後人のために進路を作るといふ事だけでも、正に一大事業と言ひ得るのであるが、その難事が、専門家ならざる人の手によつて能く為されたのである。彼等の功績の不朽にして、この一巻が永遠の生命を有する所以も亦、実に茲に存するのである。

附記

外山正一の雅号、山の由来に就いては、井上巽軒が「懷旧談」(昭和十三年一月『学鑑』)の中で詳しく説いて居るので、次に引用しておく。――

矢田部氏は自ら尚今居士と言つてゐたのであるし、又自分は巽軒として漢詩を作つて居つた。それで新体詩抄の中には矢田部氏は尚今居士と称し、自分は巽軒居士と称してゐるが外山氏は号も何も無い。それで何と言つたらよからうかといふからいやそれは、山居士と言つたらよからうと自分が言つた。外山といふ人はあれで崎人で奇妙な事を喜ぶ人であるから八丈伝の、山法師といふ名がある所から思ひついて、山仙士と言つたのである。而して又外山の字の外側の、が、であるから旁々、山仙士と言つたらよからうと斯う言つた。それから外山氏は忽ちあゝそれはいいと言つて、山仙士と称する事になつた。外山氏は逆も仙人のやうな人でなく余程俗っぽい処があつたが併しそれが即ち戲号で到頭、山仙士となつてしまつた。

尚、矢田部良吉の雅号「尚今」は、未亡人談によると、新しい事を好んだ彼の性格から来たもので、過去よりも現在を尚ぶといふ気持からつけられたのだとの事である。

新旧異同弁

『新体詩抄』初編に見出される若干の誤植は、巻末に附せられた正誤表に於て訂正されたのみならず、再版の際にも訂正されてゐるが、而も尚、初版の誤植を其假踏襲したり、新らしい誤植が添へられて居るのを見る。今、次に新旧二巻の誤植訂正表を掲げ、併せてその異同を一目瞭然たらしめる事とした。但し漢文の返り点や、ルビ、濁り等を省いてあるものは、煩を避けて掲げないこととした。尚、※印は初版巻末の正誤表に挙げてあるもの、すべて六個を数へる。

初 版

○印(正)

再 版

●印(誤)

新体詩抄

新体詩抄

童 稚

童 稚

用今之語。周到精緻

用今語。用至到精緻(誤)

哉

也

猶太固

猶太固

非ト為シ、所ナリ

非ト為シ、所ナシ

アツクシエ、シヨシ、オフ、アイヂヤス

「オフ」を「オス」と誤植す

※シーキスピール

シエ。キスピール

表 題

巽軒 序

尚今 序

山序

凡例
目次
ブルームフィールド
兵士帰郷の詩

テニス
軽騎隊追撃の詩 解題

グレ
墳上感懐の詩

ロングフェロー
人生の詩
テニス
船将の詩

拔刀隊の詩
キングスレー
悲歌

鎌倉の大仏に詣でて 解題

ウルゼーの詩
社会学の原理

ロングフェロー
児童の詩
シエーキスピール
ヘンリー第四世

苟且

感動せられたる時の鳴方は
漢学者の唐詩を
全く三十一文字

ウベルス
句

ロングフェロー氏

※嗟難

見へにけり

老ひにけり

わつと斗に

手柄

吟咏

從横むじん

敵の陣

あさばらけにぞなりぬれば

冥土

栄利(誤)

苟且 「且」(正)

最後の「は」無し
漢学者が唐詩を

全く三十一字(誤)

外山正二識の次に
柳南醒史書とあり

ウベルス
句

ロングフェルロー氏

嗟嘆

見へにけり

老ひにけり

わつと計に

手柄

吟味

從横むじん 「縦」(正)

敵の陣

あさばらけにぞなりぬれば

冥土

栄利(誤) 「えいり」(正)

よみじ
黄泉(誤)

たましい

手柄

をほうなばら

又きて

帆架

※卑法者

消る斗に

※甚少ナリ

家康ひとり徳ありと

栄曜

栄えゆき

絡き込まれたら(誤)

足も据はらず

※来れはらはべ

不思議

惣身

よみぢ
黄泉(正)

たましい

手柄

おほうなばら

又きて

帆架

卑法者

消る計に

甚少ナシ

家康ひとり徳ありて

栄曜 「耀」とあるべきもの

栄えゆき

絡き込まれたら(正)

「据わらず」とあるべきもの

来れわらはべ

不思議 「議」とあるべきもの

惣身 「捨」に同じ

ハムレット(尚今)

ますら
大丈夫

わびてたべ

男 児(誤)

※死んで眠りの

あじきな
無情き(誤)

祈たもて給へ(誤)

ハムレット(山)

ますら
大丈夫

わびてたべ

男 児(正)

死んで眠りて

あじきな
無情き(正)

祈たもて給へ(正)

復刻『新體詩抄』附録 豆辞典

尚今序

其処ル所ノ社会
化醇

(読方と註解)

「ブル」(「居」ルニ同ジ)

「氣化」或る物質の液体から気体に変じたり固体が気体になつたりする現象をいふ。

「ナホ」

「クラヒ」(「喰ヒ」ニ同ジ)

「トモニ」(「共ニ」ニ同ジ)

「ケイシヤ」(「此頃」ノ意)

「事」字の略体

「ヨシ」

「イツクンヅ」

「スベカラク」

「コウショ」

「サトル」

「シカイフ」

山序

蕩

弗
最と
町鳴らしめ
雷木

「うごかす」

「不」に同じ

「いと」

「うならしめ」

挿木(すりこぎ)の誤か

玉の緒の歌(序)

固と人の
音止め
熟ら

蛋ニ
瓶造
但々
尤ム
作ル

同(本文)

胸たも

船將の詩

軍の船

容なく

辱と志

悪むべし

拔刀隊

例

皇国

「もと人の」

「ね止め」

「つらつら」

「ツトニ」(「早く」ノ意)

(「サウジウ」)(「創造」ニ同ジ)

「タダ」

「トガム」

「ナル」

「胸だも」

「いくさの船」

「かたちなく」

「はちどいかり」

「にくむべし」

「ためし」

「みくに」

武士

仮令ひ

武士と生れた

勸学の詩

朱文公

少年易老の詩

渾て

難波入江の村あしの

ひとよの如く思はれて

螢や雪の光りにて

怯るべき

悲歌

西山

挑んと

三つの屍ぞ

屍の跡の

鎌倉の大仏に詣てて(序)

既

既熟

既

既

既

既

既

既

既

既

既

既

既

既

既

既

既

既

既

「もののふ」

「たとひ」

「ぶしと生れた」

南宋の大儒、朱熹(1130-1200)の事。後世朱子と尊称す。

「解説」参照

「すべて」

難波入江は難波江に同じ。唯「あし」にかけるため言葉で意味なし。

したものは、短い時間の意。

其支那の車風が家賃しく油が無かつたので螢を集めその光で、また橋康も窓の雪明りで書を説んだといふ故事に由る。

「おそるべき」

「せいざん」

「かかげんと」

「三つのしかばねぞ」

「かばねの跡の」

「ドモ」ノ略体

精通、熟知スル事。

「ノベ」「捷」ハ「引キ舒ブル」意。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

「まじり」ハ「ノベ」事。

尚今序

其処ル所ノ社会

化醇

仍ホ

啖ヒ

与ニ

頃者

嘉シ

安ヅ

須ク

苟且

暁ル

云爾

山序

蕩

弗

最ト

町鳴らしめ

雷木

瘧

悔しき

をのか

飯令へ

極め

凡例

看官

兵士故郷の詩

夾に

後に

狎れたる

居はする

席

類は

斗に

愚まし

軍

熟くと

あるじの老と

嗜し泣き

老の眼

弾き

英国海軍の詩

都て

軽騎隊進撃の詩

訳を糾す

大砲方

目冷しき

孫ひこやしやご

墳上感懐の詩(序)

適々

以為ク

捉模

援カズ

加之

同(本文)

徐に

余ひとり

其外に

(読方と註解)

「ヨル」(「居」ルニ同ジ)

「気化」或る物質の液体から気体に変じたり固体が気体になつたりする現象をいふ。

「ナホ」

「クラヒ」(「喰ヒ」ニ同ジ)

「トモニ」(「共ニ」ニ同ジ)

「ケイシヤ」(「此頃」ノ意)

「事」字の略体

「ヨシ」

「イツクンゾ」

「スペカラク」

「コウショ」

「サトル」

「シカイフ」

「うごかす」

「不」に同じ

「いと」

「うならしめ」

拙木(すりこぎ)の誤か

「啞」に同じ

「くやしき」(「口惜しき」の意)

「おのが」

「たとへ」

「きめ」(「定め」の意)

「ミル人」

「げに」

「うしろに」

「なれたる」

「おはする」

「むしろ」

「たぐひは」

「ばかりに」

「おぞまし」(「愚なり」の意)

「いくさ」

「つくづく」と

「あるじのらうと」「老」は「老人」の意。

「嬉し泣き」

「おいのめ」

「はじき」

「すべて」

「わけをただす」

「おまづゝがた」(「大砲組」「砲手」の意)

「めざましき」

孫曾孫玄孫「やしや」は「やしほこ」の訛。

「タマタマ」

「オモヘラク」(「思フニ」ノ意)

「ソクモ」(「捕ヘル事」)

「ヒカズ」(「援」ハ「引」ニ同ジ)

「シカノミナラズ」

「しづかに」

「われひとり」

「そのほかに」

武士

飯令ひ

武士と生れた

勸学の詩

朱文公

少年易老の詩

渾て

難波入江の村あしの

ひとよの如く思はれて

螢や雪の光りにて

怯るべき

悲歌

西山

挑んと

三つの屍ぞ

屍の跡の

鎌倉の大仏に詣てて(序)

陀

眺熟

據べ

撲ス

妄誕

漫言

謗劣

頃者

新聞雑誌

一祭ニ供ス

疏ク

精シ

同(本文)

建長

稲多野局

見者無厭

明応

紫磨金仙

暴され

此に

余も

涅槃

凡夫不覚

無明の夢

浮屠氏

夫人

後生

旋と

高僧ウルセー

ウルゼー

都て

こらへをふせず

恐怖さ

軍する

ルシファ

春の詩

歌む

社会学の原理

定まり

四足

「もののふ」

「たとひ」

「ぶしと生れた」

南宋の大儒、朱熹(1130-1200)の事。後世朱子と尊称す。

「解説」参照

「すべて」

難波入江は難波江に同じ。唯「あし」にかけるため言葉で意味なし。

したもので、短い時間の意。

其支那の車胤が家貧しく油が無かつたので螢を集めその光で、また嵇康も窓の雪明りて書を讀んだといふ故事に由る。

「おそるべき」

「せいざん」

「かかげんと」

「三つのしかばねぞ」

「かばねの跡の」

「ドモ」ノ略体

精通、熟知スル事。

「ノベ」「據」ハ「引キ舒ブル」意。

「エンス」ノベル事。

「パウタン」トリトメモ無キ嘘、偽。

「マンゲン」トリトメノ無イ言。

「センレツ」「謗」ハ浅。才学浅ク人ニ劣レル事。

「ケイシヤ」「頃日」ニ同ジ。コノゴロ。

『東洋学芸雑誌』(明治十五年六月号)

「笑ニ供ヘル、才笑草ニスル。」

「ウトク」(「疏」ハ「疎」ニ同ジ)

「クハシ」

後深草天皇の御宇の年号(1249-1256)

「いたのつぼね」後深草天皇の寵姫

「けんじやむえん」見る人が見あかぬ事。

後土御門・後柏原天皇時代の年号(1492-1500)

紫磨金は黄金の異称で、詳しくいへば紫色をおびた黄金。「仙」は仙人なれどここでは大仏を指す。

「さらされ」

「ここに」

「われも」

「ねはん」「涅槃」は「寂滅」の意。それより煩惱を絶した解脱を言ふ。

「凡夫」は凡人。「不覚」は精神の確でない事。

「むみやうの夢」「無明」は邪見・妄執の事。

「ふとし」「浮屠」は「仏陀」「ほとけ」後宮の官女の称。

「ごしやう」来生、未来。

「しかと」

「すべて」

トマス・ウルジー(1475-1530)ヘンリー七世の教師、ヘンリー八世の施布係大官となつた人。

「堪へ果せず」

「おそろしさ」

「いくさする」

セイタン、魔王の事。

「やむ」

「きまり」

「よつあし」

山序

「ケイシヤ」(「此頃」ノ意)
「事」字の略体
「ヨシ」
「イツクンゾ」
「スベカラク」
「コウシヨ」
「サトル」
「シカイフ」

蕩

「うごかす」
「不」に同じ
「いと」

最と

「うならしめ」
挿木(すりこぎ)の誤か
「啞」に同じ

雷木

「くやしき」(「口惜しき」の意)
「おのが」
「たとへ」
「きめ」(「定め」の意)

極め

「ミル人」

凡例

「げに」
「うしろに」
「なれたる」
「おはする」
「むしろ」
「たくひは」
「ばかりに」
「おぞまし」(「愚なり」の意)
「いくさ」
「つくづく」と

兵士故郷の詩

「あるじの老と」
「老」は「老人」の意。
「嬉し泣き」
「おいのめ」
「はじき」

英国海軍の詩

「すべて」
「わけをただす」
「おとづ」がた」(「火船組」「砲手」の意)
「めざましき」
孫曾孫玄孫「やしやこ」は「やしはこ」の訛。

軽騎隊進撃の詩

「タマタマ」
「オモヘラク」(「思フニ」ノ意)
「ソクモ」(捕ヘル事)
「ヒカズ」(「援」ハ「引」ニ同ジ)
「シカノミナラズ」

墳上感懐の詩(序)

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

適々

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

以為ク

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

援カズ

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

加之

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

同(本文)

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

徐に

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

余ひとり

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

其外に

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

寇をなす

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

量

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

ハムデン

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

ミルトン

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

クロムエル

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

利をあみす

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

清める

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

争で

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

眼の光り

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

世のうさ杯を

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

人生の詩

「おまへ」
「おまへ」
「おまへ」

難波入江の村あし

難波入江は難波江に同じ。唯「あし」にかけるた
めの言葉で意味なし。
ひとよの如く思はれて、
螢や雪の光りにて
怯るべき
「おそるべき」

悲歌

西山
挑んと
三つの屍ぞ
屍の跡の
「かばねの跡の」
「せいざん」
「かかげんと」
「三つのしかばねぞ」
「かばねの跡の」

鎌倉の大仏に詣てて(序)

「ドモ」ノ略体
精通、熟知スル事。
「ノベ」「摠」ハ「引キ舒ブル」意。
「エンス」ノベル事。
「バウタン」トリトメモ無キ嘘、偽。
「マンゲン」トリトメノ無イ言。
「センレツ」「謗」ハ浅。才学浅ク人ニ劣レル事。
「ケイシヤ」「頃日」ニ同ジ。コノゴロ。
『東洋学芸雑誌』(明治十五年六月号)
一笑ニ供ヘル、才学草ニスル。
「ウトク」(「疎」ハ「疎」ニ同ジ)
「クハシ」

同(本文)

後深草天皇の御宇の年号(1249-1256)
「いたのつぼね」後深草天皇の寵姫
「けんじやむえん」見る人が見あかぬ事。
後主御門・後柏原天皇時代の年号(1492-1500)
紫磨金仙
暴され
此に
余も
涅槃
凡夫不覚
無明の夢
浮屠氏
夫人
後生
庭と
高僧ウルゼー
ウルゼー
都て
こらへをふせず
恐怖さ
軍する
ルシファ

春の詩

「堪へ果せず」
「おそろしさ」
「いくさする」
セيطان、魔王の事。
「やむ」

社会学の原理

「きまり」
「よつあし」
「ただせば」
「のみ」
「はたらきに」
「ことわざは」
「烈しくまはる」
「とうがらし」のつもりか?

児童の詩

「いかなる」
「つくし」
「むき」(「虧」は欠、損傷の意)

ヘンリー第四世

「いかなる」
「つくし」
「むき」(「虧」は欠、損傷の意)

ブルセー一家

「いかなる」
「つくし」
「むき」(「虧」は欠、損傷の意)

ブルセー一家

「いかなる」
「つくし」
「むき」(「虧」は欠、損傷の意)

「いかなる」
「つくし」
「むき」(「虧」は欠、損傷の意)

ハムレット(部分)

キナ

キナ